

教育科学研究会編集

# 教育

No.816

特集1

## 現代の 思春期と中学校

思春期に向きあう教育実践の切り口  
福井雅英

〈インタビュー〉中学生が育つシーンに出会いたい  
原田葉子

中学生の声を聴く  
編集部

「教師やからちゃんとせな」いうん捨てたら？  
大野孝之

中学生、震災のなかを生きる  
制野俊弘

生徒会の自治を求めて  
長野浩三

悩める教師たちへ——目線を変える11のフレーズ  
宮下 聡

特集2

## 高校の特別支援教育

高校の特別支援教育を変える三つのフレーム  
川俣智路

「特別親切」、だから「特親クラス」  
竹本弥生

「ひとりを大切」は「みんなを大切」  
上西祐子

「特別」ではない特別支援教育  
島貫 学

1

2014. January

かもがわ出版

# 参加型支援を受けて夢をかなえて

NGO シャプラニール地域連絡会むさしの代表

東 宏乃  
AZUMA Hirono

## ストリートチルドレン支援

バン格拉デシユでストリートチルドレン（以下、ストチルと略す）の支援を行っている地元NGO・オポロジェヨ・バングラデシユ（「オポロジェヨ」とは、ベンガル語で「絶対負けない」の意味。以下、ABと略す）の支援のターゲットは、①ストリ

ートチルドレン、②スラムに暮らす子ども、③働いている子ども、④売春地域で働いている母親、である。支援の目標は、子どもたちが勉強し生きるスキルを上げ、どんな子どもも社会の財産であるように育てることであるという。

ABは、日本のNGO「シャプラニール市民による海外協力の会」を含め、14の団体や機関からの資金を得て、年間のべ8万人ほどの子どもを支援している。

ストチルが、ABにアクセスする入口となる青空教室は、全国に24か所。ストチルは、青空教室での活動に参加することで、一時庇護所であるドロップ・イン・センター（以下、DICと略す）に通うようになる。DICは、全国に12か所ある。

DICは、しだいに夜間も宿泊できる施設へと整備され、ストチルも路上での寝泊まりから屋根のある部屋に寝ることができるようになった。そうすることで、子どもらしい振る舞いや、遊びや歌などの子ども文化を取り戻していったという。

バン格拉デシユ政府も、NGOの強い働

きかけを受け、このようなセンターの重要性を認め、最近、全国64県に「子ども相談センター」を設置したそうだ。

ABは、シャプラニールのカウンタートであり、両者は、ストチル問題をどう事業化するか模索状態だったので、まずは10年活動しようとしたという。ただ、ドナー（資金提供者）がエンドレスで支援をし続けることは、よい結果を招かないとも思っていたそうだ。

実際、10年たつて、ABはDICの運営をシャプラニールから独立して行うようになり、ジャトラバリ・DICでは、運営費の半分以上を、地域の人が担うようになった。米屋であれば米を、八百屋であれば野菜を、そしてビジネスマンであれば寄付金を、提供するようになったのである。そこまでこぎつけるには十年余の年月を必要としたが、ストチルを叩いたり邪険にしたりしていた大人たちが、シャプラニールとAB主催のセミナーに参加して、ストチルを自分たちの地域の子どものとして認めることで支援が成り立つようになったという。

## 「箱」ではなく「居場所」を

その10年の活動の軌跡のなかに、前編で紹介したサニアさん（現在18歳）がいる。

ABは、DICを、単なる宿泊所という「箱」にするのではなく、ストチルが子どもらしくいられるような日常を復活させ、自立への足がかりを得る場になるように運営した。具体的には、DICの機能の一部を、子どもが担うようにし、たとえば、食事委員会、掃除委員会、文化委員会、子ども銀行委員会、ピアサポート委員会といったように、参加型にしたのである。



サニアさんと筆者

その子ども銀行委員会の中心をサニアさんが担ったのだという。子どもが稼いできたお金を、大人に巻き上げられないように、DICに子ども銀行をつくり、大人のスタッフがそれを預かったのである。

サニアさんは、帳簿係を担い、自分でも7万円ほどの貯金をし、スラムに暮らしていた母親を引き取って、アパートを借り、母親と同居するという念願の夢をかなえた。そして今年から、工場で働き、月に約6000円の月給を稼ぐまでに成長した。

DICの責任者のアラムさんによれば、支援には3本の大事な柱があるという。

- ①愛情（スタッフや地域の人々からみんなの子どもとして扱われること）
- ②モチベーション（子どもにも絵空事ではなく実現可能な夢を抱かせること）
- ③専門スタッフによるカウンセリング

①②として、DICを卒業した先輩格の青年が、イード祭など、年間行事のお祭りのときに、差し入れの食べ物を持って後輩を訪ねるといことも入っているのだそうだ。そして、サニアさんのようにきちんと

成功した青年の姿を見ることが、ストチルの夢を育むロールモデルにもなるという。

この話は、なんだか、日本の子どもの居場所の機能と運営にも参考になる話ではないだろうか？ 「箱」が大事なのではなく、その箱の中身を「子どもの参画」でつくっていく。そうすることで、ストチルは、長いスパンで人間としてのリハビリをしているのだと、いいである。

サニアさんは、現在、DICの文化委員会担当のボランティアとして、女の子の踊りの振付を手伝いに、センターに通っている。DICを一言で表すと？ という私の問いに、彼女は「私の家族」と答えた。サニアの笑顔がそのまま、子どもたちの笑顔に重なり、ここ数年DICを毎年訪問する私の心を慰めてくれている。

ABの代表のワヒダさんによれば、DICの運営のやり方は、世界の多くの途上国において、NGOが行うストチル支援のモデルになっているそうである。

聡明で愛あふれるバン格拉デシユの人たち。彼らと私のつきあいは続く。